

Optics Japan 2000 参加報告

吉 川 宣 一

(武蔵工業大学工学部)

Optics Japan 2000 が、平成 12 年 10 月 7、8 日にわたり北見工業大学で開催された。当日参加申し込みを含めると約 380 人もの参加者があり大盛況であった。今回は、ホームページを通じた講演申し込みや講演プログラム・宿泊情報などの継続的な提供など、本格的にインターネットが活用されており、今後の指針になると思われる。

講演会は、特別・招待講演、シンポジウム、一般講演(口頭・ポスター発表)に分けて行われた。学術討論以外のコミュニケーションの場として、招待講演者との昼食会や講演会終了後のナイトセッションが設けられた。

8 件の特別・招待講演が 2 日間に分けて行われた。光技術に関する基礎研究から応用研究、基礎物理的な話題や社会的な応用など非常にバラエティーに富んだ内容で構成されていた。ナノデバイスを可能にする微細加工技術と 300 m もの大きな干渉計を用いた重力波検出の講演が非常に興味深かった。ソーラーエネルギー利用に関する講演では社会基盤技術における光技術の重要性が示されており、光技術が社会的にも多岐にわたって利用されていることをあらためて確認することができた。

シンポジウムは 5 つの公募テーマに基づき講演が行われた。シンポジウム方式は、テーマに対する深い議論や新しい知識が得られるなどたいへん有意義であると思われる。しかし、シンポジウムと一般講演との区別が曖昧になっているようにも感じられた。これは公募テーマの範囲が広すぎるためではないかと思われる。シンポジウムとして別枠で行うのであれば、具体的にテーマを設定し、講演内容も選別してよいのではないだろうか。もちろん発表件数が少なくなるのが予想されるが、シンポジウムだけ講演時間を増やすなどして対処できるものと思われる。

一般講演は、口頭・ポスター発表とも活発な議論が展開されていた。会場の位置関係もよかったことから移動もスムーズに行われており、各会場どこも盛況であった。ポスター発表に関しては、一度に多くの発表が行われたため、時間をかけてみるができなかったという意見が少なからずあった。これは日程、会場などに密接に関係しており決定的な解決策はないと思うが、改善されることを期待する。

ナイトセッションは、「光学と光学会の 21 世紀のブレイクスルー」と「光が拓くナノの世界」という 2 つのテーマを設定して 2 部屋に分かれて行われた(筆者は前者に参加した)。各部屋とも 20 人程度の参加者があった。前者に関しては、日本光学会の国際化、他学会との協力、将来的な日本光学会のあり方などについて議論された。今回の参加者において企業からの参加者が少ないことが報告され、日本光学会の社会的評価が曖昧になっていることが指摘された。社会情勢がドラスティックに変革しようとしている現在、日本光学会独自の戦略も必要であるなど、参加者からさまざまな案が提案された。時間的な制約もあり議論をまとめるには至らなかったが、これからもさまざまな場所で議論されるべき問題であると思う。それと同時に今後は迅速な行動も重要になるだろう。後者に関しては、ボードメンバーがテーマ内容を丁寧に解説してくれたこともあり、たいへん好評だったようである(学生もかなり参加していた)。

最後に、本講演会の開催・運営にご尽力くださいました実行委員ならびに講演者の皆様に深く感謝申し上げます。

(E-mail: yosikawa@ml.ec.musashi-tech.ac.jp)